２　次代を担う青少年の自立に向けた健全育成事業

（１）モデル的事業（特色あるプログラム・実践研究事業）「アクティブ・ジオキャンプ」

１　趣旨

自然体験活動や宿泊体験を通して、青少年の調理・食生活に対する自信、食に対する感謝の気持ちや自己肯定感を高めるとともに、日常における運動習慣のきっかけづくりになることを目的に実施する。

２　期日

令和６年７月 27 日（土）～令和６年７月 28 日（日）　プレキャンプ
令和６年８月 15 日（木）～令和６年８月 21 日（水）　ジオキャンプ

３　会場

国立磐梯青少年交流の家
松原キャンプ場
天鏡台、五色沼、小野川不動滝、猪苗代湖、桧原湖、磐梯山

４　参加者

16 名（小学生 11 名、中学生５名）

５　主な活動内容

（１）食育のメスティン調理

毎日３食のうち１食を野外炊飯にしてメスティンによる調理を行った。献立を考える、必要な材料を買出す、調理する、食べる、片づけるという「食」の一連の流れを体験した。

（２）運動習慣づくりのための活動プログラム

運動習慣を身につけるきっかけづくりのために、天鏡台ハイキングや五色沼ハイキング、シャワークライミング、猪苗代湖畔ウォーク、カヌー・湖水浴、磐梯山登山③コースを行った。少しずつ運動量が上がっていくようにプログラムを組んだ。また、歩数計を用いることで、その日の歩数や消費カロリーなど自分の運動について調べられるようにした。

６　事業の成果と課題

（１）成果（アンケート結果より）

・今までよりも食材の産地や値段を気にしたり、買い物に出かけたり、片づけたりする機会が増えた参加者が多くなった。
・食べられる野菜が増えたり、いろいろな種類の食材に挑戦したりするなど、ジオキャンプを通じて新たにできるようになった参加者が増えた。
・普段から運動する量が増えたり、意識して外に出て活動するようになったりと、体を動かすことが日常に溶けこんでいる参加者が増えた。
・ジオキャンプで渡した歩数計を使い運動量を把握することで、自分の運動に対する関心が高まった参加者が多い。
・

（２）課題

・食の最初に必要なバランスの良い「献立を考える」部分に未到達な参加者が多いので、予算や計画の可能な範囲でプログラムに入れられるとよい。
・参加者のニーズを把握し、これまで実施したキャンプと有効度を比較したうえで、期間やプログラム等について検討する必要がある。

（２）課題を抱える青少年の支援事業（生活自立支援キャンプ）
「子ども食堂スノーキャンプ 2025 in 磐梯山」

１　趣旨
体験活動を通して、子ども食堂を利用している青少年の基本的な生活習慣や自立する力を育むことを目的に実施する。

２　期日
令和７年１月 11 日（土）～令和７年１月 13 日（月）

３　会場
国立磐梯青少年交流の家
五色沼

４　参加者
32 名（小学生 19 名、中学生 13 名）

５　主な活動内容
（１）五色沼スノーシューハイキング
研修指導員のもと、五色沼でスノーシューハイキングを行った。全員で裏磐梯物産館を出発し、るり沼まで歩いた。そこから先に進むチームと折り返すチームとに分かれた。先に進むチームは弁天沼まで歩き、積雪も多かったので、本来は水があるところまでスノーシューで進むことができた。距離別コースを設定し、参加者が自主的に選択できるようにしたことで、参加者はそれぞれのレベルに応じた達成感を味わうことができた。
（２）雪灯ろう作り・たき火・マシュマロ焼き
かまくら型や雪だるま型など、それぞれが創意工夫して雪灯ろうを作った。夜にはその雪灯ろうにろうそくをともし、幻想的な雰囲気の中、たき火をしてマシュマロ焼きを実施した。
（３）自主性を大切にした活動（雪遊び、体育館でのスポーツ等）
前日のミーティングで場所と道具、可能な活動の中から、各自がどのような活動をして過ごしたいか話し合い、参加者の自主性を大切にした活動を行った。雪遊びを選んだ参加者は、広場に大きな穴を掘ったり、雪玉を作って雪合戦をしたり、そりやスノーチューブを使って斜面をすべったりした。室内での活動を選んだ参加者は、体育館でバスケットボールや卓球、ドッジボールなどを行った。

６　事業の成果と課題
（１）成果（アンケートから）
・「千葉は雪があまり降らないから、福島に来て雪で遊ぶことができて楽しかった。」「雪でかまくらを作り、他にもいろいろな活動ができて、貴重な経験になった。」という感想から、参加者は普段できない雪上活動を存分に楽しむことができたことが伺える。
・「初対面でも優しく接してくれた。」という感想から、参加者どうしが相手を思いやる気持ちをもって活動することができたと言える。
（２）課題
・「雪遊びの時間がたりなかった。」という感想があったので、アンケート等から参加者のニーズを読み取り、どのような活動を行うかを決めていく必要がある。
・参加者の特性等について連携機関と情報を共有しながら、適切な配慮のもとで活動が展開できるようにしていくと、さらに参加者にとって充実した事業になると考えられる。

（３）全国高校生体験活動顕彰制度オリエンテーション合宿「地域探究プログラム」

１　趣旨

体験活動を通して、高校生の物事を探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力を育成することを目的に実施する。

２　期日

令和６年４月 19 日（金）～令和７年１月 25 日（土）（計９日）

３　会場

国立磐梯青少年交流の家
福島県立猪苗代高等学校
磐梯山
五色沼

４　参加者

55 名（高校生 55 名）

５　主な活動内容

（１）五色沼散策（フィールドワーク）

五色沼の成り立ちや植生などについて学びながら五色沼を散策した。

（２）震災講話・クロスロードゲーム（講義）

避難所運営時に実際に起きている課題や現状について説明を聞いた。また、避難所に届いた食料の配り方や避難所で生活する上でのルールづくりなど、実際に起きた課題を題材に解決策をグループで考えて発表する活動に取り組んだ。

（３）HUG 見学・実践（演習）

参加者が実際に通っている高校の図面を用いた HUG（避難所運営ゲーム）に取り組んだ。始めに避難所運営経験のある講師の自衛隊職員による HUG を見学した。見学後には運営についてグループで感じたことや困ったことなどを自衛隊職員に質問することで、避難所運営について考えを深めた。次に HUG を行った。見学や質問で得たことを生かしてゲームに取り組んだ。

６　事業の成果と課題

（１）成果

・オリエンテーション合宿を全学年で実施したことで、上級生がリーダーシップを発揮し、下級生は自身の役割を果たそうとするなど、主体的に活動に取り組む姿が見られた。
・猪苗代町が抱える課題に対して積極的に話し合い、意見を出し合うなど、生徒一人ひとりが真摯に課題に向き合い、解決しようとする姿が見られた。

（２）課題

・活動を通して一定の効果は得られているが、内容がほぼ昨年と同様であったため、全学年の生徒の意欲や主体性の向上を図ったり、目的を達成できたりするような内容の工夫について検討する必要がある。

（４）社会の要請に応える体験活動等事業「リオン・ドールキッズプロジェクト」

１　趣旨

自然体験を通して、身体を動かす楽しさを感じたり、家族のコミュニケーションを促したりすることを目的として実施する。

２　期日

令和７年１月 18 日（土）

３　会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

４　参加者

13 名５家族（大人５名、小学生５名、未就学児３名）

５　主な活動内容

（１）野外炊飯

活動の前半は、当施設ピロティでおにぎり作り及び豚汁作りを行った。参加者は施設食堂の炊き渡しご飯と共催のスーパーマーケットから提供された具材を使っておにぎりを作ったり、かまどで焼きおにぎりを作ったりした。豚汁は水煮の野菜を使うことで、包丁を使わずに調理を進めた。参加者からは「水煮などを利用したため簡単に調理することができ、子供と遊ぶ時間を作ることができた。」という感想が寄せられた。また、かまどの火起こし体験では、薪や新聞紙を事前にかまどに準備しておくことで、小さな子供たちも安全に活動することができた。

（２）雪遊び

活動の後半はグラウンドでスノーラフティング体験をしたり、ふれあい広場でそり遊びとスノーチューブを行ったりした。スノーラフティングについては、参加者全員が初めて体験する活動であるため、スピードを調整しながら安全に配慮して活動を進めた。そり遊びとスノーチューブについては、施設職員とボランティアがスタート地点及びゴール地点に立つなど安全のため連携して活動した。参加者からは「なかなかできないことができて楽しく過ごせた。スキー場より安全に活動できた。」といった感想が寄せられた。

６　成果と課題

（１）成果

本事業は地元のスーパーマーケットを運営する企業と共同運営することによって、広く県内各地に広報することができた。また、野外炊飯は企業からの材料提供をもとに行うことで受益者負担を軽減することができ、家族で参加しやすい費用で実施することができた。

（２）課題

施設側の担当と企業側の担当との連絡は電話やメールで行うことが多く、検討事項の決定にかなりの時間を要した。対面での打ち合わせの際に、できる限り事前に確認すべき事項を共有しておき詳細な打ち合わせができるようにすることが必要である。

（５）地域ぐるみ事業「スマイルばんせい」

１　趣旨

家族で体験活動を楽しむことを通して親子でのコミュニケーション促し、家庭教育の充実を図ることを目的に実施する。

２　期日

令和６年９月 29 日（日）

３　会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

４　参加者

49 家族　175 名（大人 20 名、小学生 69 名、未就学児 24 名）

５　活動内容

福島県内の小学１～２年生を含む家族を対象に、たき火体験や金魚すくい、ばんせい探偵団、赤べこ絵付け体験、書道体験、ボルダリング、テント設営体験、ニュースポーツの８つの体験ブースを設置した。書道体験は講師を招聘し、15mの書道用紙に大筆を使って文字を書く活動を行った。その他には磐梯青少年交流の家にある設備や備品を使ったたき火体験、赤べこ絵付け体験、ボルダリング、テント設営体験、ニュースポーツのブースを設置して、それぞれの体験ブースを自由に移動しながら楽しむことができた。

６　成果と課題

（１）成果

書道体験ブースでは、大筆を使ってパフォーマンス用の大きな書道用紙に文字を書いたり、書家の迫力あるパフォーマンスを見たりしたことで、「普段できない貴重な体験となった。」「書道パフォーマンスは迫力があり心に残った。」などの感想があり、親子で一緒に楽しんで満足してもらうことができた。

他には「たき火体験では子どもと体験でき、キャンプに行きたくなった。最初から教えるのではなく、自分で考えて活動させてくれることが楽しかった。」「ばんせい探偵団では適度な難易度があり、子どもたちが楽しめた。施設の中を散策するきっかけになった。」「娘が習字に興味をもった。」などの感想を得た。

これらのことから、それぞれの体験活動が親子でのコミュニケーションの機会を促す契機となったり、家庭教育につなげるきっかけを作ったりすることができた。また、８ブースを設置したことで各ブースで体験する人数が分散され、参加者が一つ一つの体験活動に十分な時間を確保することができた。

（２）課題

８つのブースをそれぞれ本館、キャンプ場、ふれあい広場に分けて配置したが、各ブース間の移動に時間を要してしまった。ブースの場所を本館及びふれあい広場等にコンパクトにまとめることで、参加者の移動距離を少なくしていくことが必要である。

書道パフォーマンス体験では午後の部の参加者が少なかった。幼児がいる家族にとって、遅い時間帯は子どもたちが疲れて帰宅してしまうことが要因として考えられる。書道の体験時間を午前にまとめることで、参加しやすい環境を整えることが必要である。

３　青少年教育指導者等の養成事業

（１）ボランティア養成・研修事業「ばんボラセミナー」

１　趣旨

国立青少年教育振興機構のボランティア養成カリキュラムに沿った講義や演習などを通して、青少年教育ボランティアを養成することを目的に実施する。

２　期日

令和６年５月 25 日（土）～26 日（日）

３　会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

４　参加者

33 名（高校生９名、短期大学生５名、大学生 19 名）

５　主な活動内容

（１）青少年教育の理解（講義）

常磐大学の松橋義樹氏を講師にお招きし、青少年教育の発達段階に応じた体験活動の効果や意義について講義をいただいた。参加者からは「ねらいを考えて参加者に対する接し方を考える機会になった。」「ボランティアについて改めて考える機会になった。」といった感想が寄せられた。

（２）青少年教育施設におけるボランティア活動（講義）

磐梯青少年交流の家のボランティア活動内容について、先輩ボランティアの進行のもと、参加者が話を聞く時間を設定した。参加者からは「具体的な活動内容について知ることができてモチベーションがとても上がった。」等の感想が寄せられた。

（３）ボランティア活動の技術（演習）

演習では野外炊飯倉庫内の用具の配置を見たり、かまどを使って薪に火を付ける際のポイントや安全上の留意点等について学んだりした後、野外炊飯棟でカレーライス作りを行った。参加者からは「いろいろな役割があることが分かった。今後は安全管理に配慮しながら活動したい。」などの感想が寄せられた。

６　事業の成果と課題

（１）成果

・　アンケートの記述にあったように、先輩ボランティアからボランティア活動についての体験談や活動を通して学んだことを聞くことで、参加者はボランティア活動についての具体的なイメージをもち、今後のボランティア活動への意欲を高めることができた。

・　アイスブレイクや野外炊飯等の演習で参加者同士が一緒に活動する時間を十分に確保する構成にしたため、初めて会った参加者同士がスモールステップでコミュニケーションをとることができた。

（２）課題

・　参加者のアンケートに「決まったメンバーでのディスカッションが多く、話し合いの流れが決まってしまって少し飽きてしまった。」という感想があった。意見交流のさせ方などにバリエーションを持たせるなどして、参加者の意欲を持続できる工夫をしていきたい。

（２）ボランティア研修・自主企画事業「ボランティア自主企画（Next Stage Challenge　～中学生への第一歩～)」

１　趣旨
国立磐梯青少年交流の家で活躍する法人ボランティアが主体となって教育事業を行うことにより、青少年教育ボランティアとしての自覚や自主性を育むことを目的とする。

２　期日
令和６年５月 25 日～11 月５日（火）

３　会場
国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

４　参加者
11 名（自主企画担当ボランティア６名、事業ボランティア５名）

５　主な活動内容
（１）ボランティア自主企画　立案（自主企画担当ボランティア：大学生１名、短大生２名）
学生が教育事業の企画を行うにあたり、まず当交流の家の企画指導専門職による事業の企画方法についての講義を受け、ねらいの立て方やプログラムの選定方法等を学んだ。その上で、事業に参加した子供たちがどのような姿になってほしいのか予想像を考えさせ、そのためにどのようなプログラムが必要か検討を行った。協議の結果、10 月 14 日に「Next Stage Challenge　～中学生への第一歩～」を開催することを決定した。

（２）ボランティア自主企画　プログラムの検討（自主企画担当ボランティア：大学生４名、短大生２名）
「Next Stage Challenge　～中学生への第一歩～」のプログラム内容をZOOM会議システムで話し合った。中学校への進級を控えた小学校高学年の子供たちに成功体験をさせて自信をもたせることをねらいとし、自然体験活動、野外炊飯、ニュースポーツ等にチャレンジさせることにした。その後、プログラムの進行表や広報物の作成の役割分担について確認した。

（３）ボランティア自主企画　実地踏査（自主企画担当ボランティア：大学生２名）
「Next Stage Challenge　～中学生への第一歩～」で行うプログラムを、自主企画担当ボランティアで実際に行った。野外炊飯を行う中で刃物の取り扱いや火を起こす際の注意点、調理手順について確認した。また、自然体験活動とニュースポーツでは、内容やルールについて調整した。それぞれの活動内容がねらいに則したものになっているか検討し、参加者に分かりやすく説明するために、話す内容と順番等について確認した。

（４）ボランティア自主企画　当日（自主企画担当ボランティア：大学生４名、短大生２名）（当日ボランティア：大学生４名、高校生１名）（自主企画事業参加者：小学校５年生７名、小学校６年生７名）
中学進学を控えた高学年の子供たちが自然体験ウォークラリーや野外炊飯、ニュースポーツといった新しい経験をすることを通して、「できるようになった」ことを実感させるとともに、自信をもって何事にも挑戦しようとする心情を育むというねらいのもと、日帰りの事業を行った。ボランティアのサポートを受けながら、５種目の自然体験活動、かまどでのパエリア作り、ボッチャ、ゴールボールを参加者同士で力を合わせて行った。

６　事業の成果と課題
（１）成果
実施後のアンケートには「友達も増えたし、料理もできた。」「初めて経験することが多くて楽しかった。」「家で料理をしなかったけれど、作り方を覚えたので挑戦してみたい。」といった成功体験や新しいことに挑戦しようとする意欲についての感想が多いことから、自主企画担当ボランティアの設定したねらいを達成することができたと考えられる。
また、他施設のボランティアや経験年数の異なるボランティア同士で交流を深め、子供たちへの声のかけ方や関わり方についてのスキルアップにつながった。
（２）課題
当日協力できるボランティアの応募が想定よりも少なかったので、他の教育事業にボランティアが来た際に参加を促したり、開催日を夏休み中に設定したりして、参加しやすい環境づくりが必要だと考えられる。

４　東日本大震災復興支援プロジェクト

「第１０期福島こども未来塾」第１回

１　趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

２　期日

令和６年７月６日（土）～７日（日）

３　会場

福島県環境創造センター交流棟　コミュタン福島（福島県田村郡三春町深作 10-2）
福島県立博物館（福島県会津若松市城東町 1-25）
国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

４　参加者

38 名（小学生 30 名、中学生８名）

５　主な活動内容

（１）オープニング、コミュタン福島での東日本大震災を考える活動

オープニングにおいて、過去の活動の様子や今年度の活動の概要がわかる動画の視聴、理事長のあいさつや職員による説明によって、これからの未来塾での活動に見通しをもつことができた。コミュタン福島の見学や放射線測定実験では、東日本大震災や放射線の被害について詳しく学ぶことができた。参加者からは「福島県の現状や県民の努力が分かった。」「今でも地元に帰れない人がいるのだと知った。」「放射線についてもっと詳しく知りたいと思った。」等の声が聞かれた。

（２）アイスブレイク

バースデーチェーン等のレクリエーションを通して、初めて出会う仲間の名前を覚え、交流を深めることができた。参加者からは「未来塾での友達ができた。」「はじめは緊張したけれど、新しい友達と仲良くすることができた。」等の声が聞かれた。

（３）福島県立博物館での防災・減災を考える活動

東日本大震災の被害や当時の避難所の様子について知るだけでなく、今後、実際に災害が発生した場合にはどのような行動をとったらよいのか、避難所で起こるだろう課題をどう解決したらよいか、家庭ではどのような備えが必要かなど、防災・減災について班ごとに考えることができた。参加者からは「家の中でどこか危ないところはないか確かめようと思う。」「ローリングストックはすぐにできそうなので、やってみたい。」等の声が聞かれた。

６　事業の成果と課題

（１）成果

・　「復興に向けて県民がたくさん努力をし、防災のための行動をしているところが福島県のよさだと思う。」「災害が起きたらボランティア活動をしてみたい。」「災害時に人任せにしないで、どう行動するかを考えられた。」といったアンケートの感想から、震災の被害について理解を深めただけでなく、今後もしもの時に自分たちがどのような行動をとったらよいか考えを深めた参加者が多かった。

（２）課題

・　参加者の様子について把握することができたので、今後の未来塾の活動では班編成や参加者への関わり方を工夫して、より一層未来塾の目的にせまれるようにしたい。

「第１０期福島こども未来塾」第２回

１　趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

２　期日

令和６年７月 20 日（土）～21 日（日）

３　会場

三島町交流センター山びこ（福島県大沼郡三島町西方諏訪ノ上 418）
磐梯山噴火記念館（福島県耶麻郡北塩原村桧原剣ヶ峯 1093-36）
国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

４　参加者

38 名（小学生 30 名、中学生８名）

５　主な活動内容

（１）三島町交流センター山びこでの伝統工芸を学ぶ活動

三島町生活工芸館職員の説明を聞いて、山ブドウやマタタビ、ヒロロなどを素材とした編み組細工が積雪期の手仕事として伝承されてきたことを学ぶことができた。また、指導員の方に教えていただいて山ブドウストラップづくりをし、体験を通して伝統工芸について学びを深めることができた。参加者からは「伝統工芸品を作っている人が今でも１００人以上いることが分かった。」「これからいろいろな伝統文化を受け継いでいきたい。」等の声が聞かれた。

（２）能楽体験を通して伝統文化を学ぶ活動

会津能楽会の方から歴史について学んだ後、実際に楽器（道具）に触れて演奏をしたり、面をつけたりする体験を行った。体験を通して能楽の楽器の特徴や、すり足で動く必要性について学ぶことができた。参加者からは「歩き方や謡い方の特徴を知ることができた。」「大鼓（おおつづみ）のほうが高い音が出るとは思わなかった。」「能管（笛）もやってみたい。」等の声が聞かれた。

（３）磐梯山噴火記念館、五色沼探勝路での自然について学ぶ活動

福島県の地域ごとの自然の特徴について磐梯山噴火記念館の館長から説明を聞いたり、磐梯山の噴火の再現実験を見たりして、どのようにして現在の自然環境が生まれたのかを学ぶことができた。その後は研修指導員の説明を聞きながら五色沼探勝路ハイキングを行い、磐梯山の影響で五色沼ができたことやそれぞれの沼の水の色の違い、様々な植物が息づいていることなどを学ぶことできた。参加者からは「噴火は怖いが、噴火によってできた自然の美しさに感動した。」「山登りをするなどもっと自然に触れたい。」等の声が聞かれた。

６　事業の成果と課題

（１）成果

・「福島県は自然が多く、文化を大切にして歴史をつないできたことを学ぶことができた。」「福島県の伝統文化を未来へとつないでいきたいと思った。」「福島県の文化や自然をたくさんの人に伝えていきたい。」といったアンケートの感想から、参加者は福島県のよさを見つめ直し、今後それらを守ったり、発信したりしていきたいという思いを強くすることができたと考えられる。

（２）課題

・　アンケートの感想を見ると新しい学びや発見、気づき、興味をどのぐらいもてたかという項目の伸びが小さかったので、講師と参加者の会話が深まるように関わり方を工夫することで、関心を高めることができるように工夫していきたい。

「第１０期福島こども未来塾」第３回

１　趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

２　期日

令和６年８月２日（金）～３日（土）

３　会場

いわき市漁業協同組合（福島県いわき市中央台飯野 4-3-1 水産会館 2F）
宇川ブルーベリー園（福島県耶麻郡猪苗代町三ツ和五十軒 3358）
国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

４　参加者

１日目：38 名（小学生 30 名、中学生８名）　２日目：35 名（小学生 27 名、中学生８名）

５　主な活動内容

（１）いわき市漁業協同組合での福島県の水産業について考える活動

経済産業省資源エネルギー庁の職員を講師に招き、ＡＬＰＳ処理水放出の現状や水産業への影響、今後の課題等について講話をいただいたり、班ごとに考えたりする活動を行った。参加者からは「ＡＬＰＳ処理水の安全性をいろいろな方法で確かめて世に知らせていることが分かった。」「燃料デブリはどのようにして取り出すのか知りたくなった。」「福島の魚は放射性物質が入っていて危険だと思われているけれど、安全だということが分かった。」等の声が聞かれ、処理水を取り巻く現状や今後の課題に関心をもつことができたことが伺える。

（２）いわき市沼ノ内漁港での水産業について考える活動

ホッキ貝の殻むき体験、魚の重さを当てる入札体験、ヒラメの解体の見学を行った。参加者からは「漁港に行って、今まで以上に命を感じたので、これからはもっと感謝して食べたい。」「職人さんがさばく様子を見て、自分もこんな風にやってみたいと思った。」「もっといろいろな人に福島県の魚を食べてほしいと思った。」等の声が聞かれた。

（３）宇川ブルーベリー園での福島県の農業を考える活動

ブルーベリーの摘み取りやジャムづくり体験を行った。雪の多い地域ならではの栽培の工夫や、農薬を使わずに栽培するための苦労についてお話をいただき、農家の方の思いを知ることができた。また、新鮮な野菜を使ってピザを作る体験を行った。参加者からは「自分たちで作ったジャムやピザはとてもおいしく、地元の食についてよく知り、興味をもつことができた。」「食料への感謝の気持ちを込めてピザを作ることができた。」等の声が聞かれた。

６　事業の成果と課題

（１）成果

・「これからは安心して福島の食べ物を食べたい。」「福島の魚を食べたくないという人はまだいる。そういった人たちにおいしい福島の魚を食べてもらえるようにアピールしたい。」といったアンケートの感想から、福島の食への興味・関心が広がったことが伺える。

（２）課題

・　実施後アンケートを分析すると、全体として「将来の夢や大きくなったらチャレンジしたいことについて考えられたか」という項目については低い傾向にある。活動を通して考えたり感じたりしたことが自身を見つめ直すきかっけとなるよう、意図的に働きかけていきたい。

「第１０期福島こども未来塾」第４回

１　趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

２　期日

令和６年８月 24 日（土）～25 日（日）

３　会場

郡山ユラックス熱海（福島県郡山市熱海町字玉川反田 148-2）
国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

４　参加者

34 名（小学生 28 名、中学生６名）

５　主な活動内容

（１）UNITED SPORTS FOUNDATION の４つのクリニック（種目）を通して新しいことにチャレンジする活動

①「走り方教室」では走る時の姿勢や接地時間を短くするための工夫について学んだ。参加者からは「前よりも速く走れるようになった気がする。」「２日目に実施したリレーに生かすことができた。」等の声が聞かれた。

②「車いすラグビー」では車いすを動かしながらボールをパスしたり、チームに分かれてゲームを楽しんだりした。参加者からは「障害があってもスポーツを楽しめることを知った。」「車いすに乗ることで、みんな一緒にスポーツできることが素敵だと思った。」等の声が聞かれた。

③「フラッグフットボール」では守備と攻撃に分かれてゲームを進め、作戦を立ててゲームする楽しさを味わった。「点を取ったときにチームの友達がとっても喜んでくれて嬉しかった。」「作戦を立てる良さがよく分かった。」等の声が聞かれた。

④「ピックルボール」ではサーブやレシーブを練習し、ルールを学びながらラリーを楽しんだ。「将来はピックルボールの選手になりたい。」「初めてのスポーツに挑戦できて良かった。」等の声が聞かれた。

（２）「ユニフォーム作り」「チア作り」「スポーツ大会」を通してチームワークを高める活動

チームごとにユニフォームとチア作りを行った。「チアにはみんなのいい言葉がたくさん入っていてとてもいい。」「チームで心を合わせて勝つことができた。」「４位だったけれど、自分の限界まで頑張ることができた。」などの声が聞かれた。

６　事業の成果と課題

（１）成果

・「挑戦と団結を学んだ。苦手意識のあったスポーツを楽しめた。」「２日間の活動を通してみんなと自分自身の成長を大きく感じた。」「どんな人とでもスポーツは楽しくプレイできること、チーム一丸となって勝った時はとてもうれしいことが分かった。」「何事にもチャレンジすること、失敗してもまた頑張ることなど、これから楽しく生活するための方法に気がつけた。」といった感想から、新しいことにチャレンジし、自分自身の新たな気持ちや価値観に気づくことができた参加者が多かったことが伺える。

（２）課題

・実施後アンケートから、「福島のよさ」を意識しにくい活動回であったことが伺える。福島県で活躍しているオリンピックやパラリンピックの選手の話、震災からの復興との関わり等、今回のテーマに沿って福島県について考えるきっかけとなる話題を意図的に仕組むことができるとよかった。

「第１０期福島こども未来塾」第５回

１　趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

２　期日

令和６年９月７日（土）～８日（日）

３　会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

４　参加者

35 名（小学生 27 名、中学生８名）

５　主な活動内容

（１）「チームフラッグ作り」や「チームでの表現活動」を通してチームワークを高める活動

チームごとにアイディアを出し合ってチームフラッグ作りを行った。その後 HEART Global のキャストと共にチームでの表現活動を行った。「最初は不安だったけれど、みんなが教えてくれてうれしかった。」「みんなのことがよく分かって距離が縮まった。」などの声が聞かれた。

（２）ダンスと合唱の練習を通して表現する楽しさを知る活動

苦手なことにもチャレンジしてみようとする「Yes And」の考え方をキャストの方から学んだ。その後、指導してもらうキャストを自分で選び、それぞれダンスや合唱の指導を受けた。「最初はダンスに苦手意識をもっていたが、やってみたら楽しかった。」「最初はできるわけがないと思ったけれど、実際にやってみたら意外とできると思えた。」などの声が聞かれた。

（３）練習したことを観客の前で表現する活動

練習したダンスや合唱を再度練習するとともに、新たなダンスを覚えたり、通しでのリハーサルを行ったりした。２日目の最後には保護者を招いての「みんなのショー」を行った。塾生からは「親の前で緊張したけれど、とても楽しくできた。」「ダンスは思ったより楽しく、拍手喝采を受けてうれしかった。」「人をダンスで元気づけるのがすばらしいと思った。」などの声が聞かれ、参観した保護者からは「子どもたちのきらきらした表情がとてもすてきで夢のような時間だった。」などの声が聞かれた。

６　事業の成果と課題

（１）成果

「苦手なことにも積極的にチャレンジしたい。」「この仲間に会えて本当によかったなと思った。」「自然と仲間と掛け声を合わせたり踊ったりできた。」「たくさんの人と話したり踊ったりいろいろなことができて楽しかった。」といったアンケートの感想から、仲間と協力して物事に挑戦することで、自分自身の新たな可能性を発見したり、協力することの喜びに気づいたりすることができた参加者が多かったことが伺える。

（２）課題

思春期の参加者も多いので、ダンスの前に体を動かす活動や声を出す活動を取り入れることで、なかなかなじめない参加者やダンスや歌に抵抗がある参加者もさらに意欲をさらに高めることができると考えられる。

「第１０期福島こども未来塾」第６回

１　趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

２　期日

令和６年９月 22 日（日）～23 日（月）

３　会場

ブリティッシュヒルズ（〒962-0622　福島県岩瀬郡天栄村田良尾芝草１－８）

４　参加者

37 名（小学生 29 名、中学生８名）

５　主な活動内容

（１）「Survival English」（英会話レッスン）と「Explore」（オリエンテーリング）による英語に慣れ親しむ活動

ブリティッシュヒルズで役立つ英会話レッスンや、様々な問題を解きながら館内外を歩くオリエンテーリング活動に取り組んだ。「いろいろな国の人と交流して二か国語を話せるようになりたい。」「もう少し英語を聞き取れるようになりたい。」「外国の人ともフレンドリーに接して新しい言葉を学べた。」等のアンケート結果から、参加者の英語を学びたいという意欲が高まったことが伺える。

（２）テーブルマナー講座とコースディナーで海外の文化を学ぶ活動

コースディナー時のカトラリーの位置や名前、スープの飲み方や会話の楽しみ方等を学び、学んだことを生かして実際にコースディナーをいただいた。「テーブルマナー講座やコースディナーを通して、外国の食事への関心を高めることができた。」「学んだテーブルマナーを忘れずに礼儀正しい人になりたい。」等のアンケートの感想から、普段の食事と違うテーブルマナーの文化を知ることで、外国の文化や食事へ興味・関心を広めることができたことが伺える。

（３）「British sports」「cooking scones」の体験を通して英語を学ぶ活動

イギリス発祥の球技「cricket」について英語での説明を聞き取りながら、ルールや道具の名称を理解してゲームを楽しんだ。「cooking scones」では英語で表現された材料の名称や分量、調理方法を聞き取ってスコーン作りに取り組んだ。「外国の文化に触れることはとても楽しいと思った。」「英語を理解できるか不安だったけれど、意外と分かることが多くて楽しかった。」などの感想から、体験的に英語を学ぶことで楽しさや達成感を実感できた参加者が多かったことが伺える。

６　事業の成果と課題

（１）成果

「言葉が伝わらなくてもコミュニケーションがとれることが分かった。」「これから英語の学習を頑張って将来の夢につなげたい。」「英語が楽しいと思えた。本当に海外に留学してみたい。」といったアンケートの感想や満足度調査から、多くの参加者が英語学習や海外の文化への興味・関心を広め、意欲を高めることができたことが伺える。本場イギリスの街並みや調度品が広がる環境のもと、食事や文化、スポーツや調理体験といった幅広いテーマの活動を行うことができたことが効果的だった。

（２）課題

一斉レッスンの際は内容を難しく感じている参加者が見られたが、個別に実施したオリエンテーリング活動では、自分のレベルに応じて意欲的に取り組む姿が多く見られた。より多くの参加者が満足感を高められるよう、個のレベルに応じたレッスンを多く取り入れると効果的だと思われる。

「第１０期福島こども未来塾」第７回

１　趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

２　期日

令和６年 10 月５日（土）～６日（日）

３　会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）
杉妻会館（福島県福島市杉妻町 3-45）

４　参加者

１日目：32 名（小学生 25 名、中学生７名）　２日目：31 名（小学生 24 名、中学生７名）

５　主な活動内容

（１）未来塾報告会に向けて自分の考えや思いをまとめる活動

これまでの活動を振り返り、学んだことや感じたことを漢字一文字で表した。「未来塾で勇気を学んだので『勇』、福島県の食のすばらしさを伝えたいから『食』、福島県にはたくさんの福（よいところ）があることに気づいたから『福』、災害に負けず今まで歩んできた福島県や自分自身も成長に向かって歩んだ未来塾なので『歩』」のように、選んだ言葉を発表ボードに大きく記し、その言葉をもとに報告会で発表する内容をまとめた。参加者はＯＢ・ＯＧから当時のまとめ方などを教えてもらい、参考にしながら活動を行った。

（２）未来塾記念品作成をとおしてＯＢ・ＯＧと親睦を深める活動

未来塾記念品として、会津地方の伝統工芸である「赤べこ」の絵付けを行った。絵付けをとおしてＯＢ・ＯＧとの会話もはずみ、参加者からは「今度はＯＢ・ＯＧで未来塾に参加したい。」「前はどんな活動をしていたのか分かってよかった。」「かわいらしい記念品が作れて嬉しい。」等の声が聞かれた。

（３）活動報告発表～クロージングセレモニー～

クロージングセレモニーに先立って保護者向けに発表を行った。その後、クロージングセレモニーでは代表７名が未来塾の活動をとおして感じたことや学んだことを堂々と発表した。「緊張したけれどしっかり自分の言葉で伝えられた。」「たくさんの経験をとおして、成長した自分を実感している。」等の言葉から、参加者が達成感をもって活動を終えることができたことが伺える。また、参加者代表が立派な態度で修了証書を受け取り、晴れやかな塾生の表情とともに、一緒に歩んできた仲間との別れを惜しむ姿や再会を約束する姿が見られた。

６　事業の成果と課題

（１）成果

「震災の怖さと復興への取り組みを未来へ伝えていこうと思った。」「未来塾に来る前よりも何事にも積極的に取り組めるようになった。」「福島のよいところがたくさん分かり、もっと知りたいと思えるようになった。」といったアンケートの感想から、多くの参加者が福島県の未来を考え、失敗を恐れずに行動しようとする気持ちを高めることができたことが伺える。

（２）課題

参加者とＯＢ・ＯＧが福島県のことを考えるきっかけとなるような体験を共にすることができると、より未来塾の目的に近づくことができるのではないかと考える。

５　福島「体験の風をおこそう」運動実行委員会事業

○事業目的

「体験の風をおこそう」運動の普及啓発のために、福島県内の多くの子どもたちに体験活動の楽しさを提供するとともに、保護者に体験活動の必要性や重要性を発信する。

（１）スマイルばんせい（詳細はＰ．１３参照）

（２）地域イベントや他施設での「体験の風をおこそう」運動普及啓発活動

①　事業目的

「体験の風をおこそう」運動の普及啓発のために、地域のイベントにおいて出展を行い、体験活動の重要性について広く発信をしていく。

磐梯まつり（R6.7.20）

②　期日　イベント名【場所・人数】

・令和６年７月１５日（月）学びいな夏祭り
【猪苗代町運動公園 162 人】
・令和６年７月２９日（土）磐梯まつり
【猪苗代町運動公園 208 人】

③　成果

地域の各種イベントにおいて、体験の普及啓発活動を実施した。子どもたちや保護者、地域の方々に体験の機会を提供したことにより、あらためて体験活動の楽しさや重要性を実感していただくとともに、地域力向上の推進に努めることができた。

（３）子どもゆめ基金説明会

①　事業目的

より多くの方々や青少年団体などに、子どもゆめ基金の趣旨を理解していただくとともに、申請の流れや申請書の書き方などの実務について知識を深めていただく。

②　期日：令和６年６月３日（月）　オンラインでの開催

（４）その他（猪苗代湖の自然を守る会との連携）

①　ヒシ刈りボランティアとしての協力【計６回】

・令和６年８月　２日（金）
・令和６年８月　９日（金）
・令和６年８月２３日（金）
・令和６年８月３０日（金）
・令和６年９月　６日（金）
・令和６年９月１３日（金）

ヒシ刈り（R6.9.13）

②　「猪苗代湖の自然を守る会」研修会の参加

・令和６年１１月２５日（月）　発電所、浄水場、堰分水工等の見学